

偕樂園記

山形県知事 正五位勳三等 馬淵鋭太郎 撰并篆額

県庁より南八里の処に赤湯村があり、置賜東部に属する。温泉旅館が軒を連ね、古くから温泉客が多く、年に数千数百をくだらず、弦歌管弦の音が絶えることが無い。その町民数百人が山の麓に住んでいる。

北はなだらかな丘で、南角が烏帽子山である。山といつてもそう高くなく、平野部が隆起して突き出たものである。東は白竜湖を隔てて金溪連山に対峙する。南を一望すれば、広々と開け吾妻の大嶺を相望む。人々が集い、山や川は誠に良い景色である。まさに天が造った楽園でありまた山間の名所である。

年月を経て今日に至る。盛んであった昔日の弦歌管弦の賑わいが無く、町民は日々困窮に悩んでいた。

石岡與市は町の名家である。彼は「自分のところの浴客からの収入を当てにした生活を変えて、今日の衰運を終わらせよう」と思った。そのために、娯楽や酒遊の施設を造り、多くの客を呼び寄せ、昔日の賑わいを取り戻すことは難しいことではない。後日拡張するにしても先ず娯楽酒遊の施設が必要と考えた。

明治十一年に同志と相談して、建設は良い場所にある烏帽子山を選び、花木数百本を植え、樹幹に娯楽飲食処を設け富山と名づけた。小規模ではあるが心から客をもてなし、これを本園建設の手始めとした。その時以来建設計画を定めるのに長い年月がかかった。その間、四年の間に二回の大火に遭い、住いや娯楽酒遊の施設が悉く灰塵に帰し、全村が廢墟となった。未だ慌しく復旧の力も及ばない。

明治十六年に同志と相談して敬神講を創り、新しい建設計画の趣旨の理解を得て、資金を集め事業を起こそうと考え同志を募った。しかし、こと志と異なり物議が沸騰して意見が噛み合わず転げ落ちるような状態であった。それでも與市たちは諦めることなく日夜寝食を忘れて奔走した。

三年を経て、漸く陽の目が出て多くの人の評議を得て、富玉の地に加えて二町七反歩の広大な園地になった。新に、鎮護神八幡宮を山嶺に遷宮し、花木を植え泉石を配し、飲食処を除いた。その規模は広壮で実に一方の偉観を呈した。明治十九年のことである。二十六年に名づけた偕樂園のことである。

しかしながら事業はすこぶる難儀で事業半ばにして資金を使い果たし、私財を投じて事業を継続し、義捐金を募つてようやく竣工した。

前後八星霜、その苦勞は言つべくもない。役用夫六万三千余名、石工七千九百余名という。事業費およそ三万六千八百余円、半ば強制の抛出であった。

同志の者は十六人、主幹事は石岡與市、副幹事は石岡要蔵、大山源治、有力同志者は十三人、丸森與右衛門、結城彌右衛門、小林彌五郎、渋谷藤吉、神保七蔵、後藤覺右衛門、

石岡富次郎、佐藤久七、井上松之助、高橋文次郎、小川久助、須藤孫左衛門、新山平学。

村人は偕樂園の竣工を大変喜んでその功績を碑に記することにした。

私心を捨て、勤勞を厭わずやり遂げた志のよりどころの文章を碑に刻み、次の世代に創業の難儀さはかくの如しと知らせるものである。

明治四十三年九月

起工者

赤湯町長

酒井

彌 惣

赤湯町会議員一同

赤湯区会議員一同

石工

川 井

源三郎

建方

水 林

長次郎

解説

赤湯柵塚

浦 山

孝一郎氏